

平成24年度第1回北区まちづくり協議会全体会
語り部との座談 グループB 後藤講師

重複した言葉遣いや、明らかな言い直しのあったもの、わかりづらい表現などは、整理した上で作成しています。

高橋所長（太平百合が原まちづくりセンター所長）

それでは、お疲れさまでございます。

私は、こちらのグループの進行役を務めさせていただきます太平百合が原まちづくりセンターの高橋と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、早速、座談会に入らせていただきます。

初めに、こちらのグループでみずから震災の体験をお話ししていただきます語り部の方は、ガイドサークル汐風の後藤一磨さんです。後藤さんのプロフィールを簡単にご紹介します。

後藤さんは、津波により自宅が流出いたしまして、内陸にある加美町に2次避難されました。2次避難先では、避難された方々の責任者を務めまして、コミュニティの形成にご尽力されました。

現在、南三陸町の仮設住宅に戻り、住民同士のきずな再生とコミュニティの再構築を支援する活動を行う「復興みなさん会」の代表を務められています。

また、宮城大学の非常勤講師として、地域の行政の橋渡しにもご尽力いただいております。

それでは、グループの皆さんも1人ずつ自己紹介をしていただければと思います。

時計回りに、こちらの方からよろしくお願いいたします。

【自己紹介】

後藤講師

後藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

紹介にありましたように、津波で家が流されてしまいましたが、家族3人は無事だったので、それだけが一番よかったことかなと思っています。

すぐ近くの高台に避難して命をつなぎまして、翌日、集落の東の外れにある宿泊研修施設、宮城県志津川自然の家というところに1次避難しました。そこで、20日ほど暮らしましたが、その後、2次避難いたしました。

なぜ2次避難が必要だったかというと、南三陸町というまちは、津波により行政機能を含めたすべてのインフラをなくしたまちなのです。役場職員四十数名も亡くなり



ましたけれども、役場の建物からあらゆる書類全部が流れて、戸籍づくりから新たにしなければならぬようなまちだったのです。

その場所に避難者がいると、避難者の世話をするだけで新しい行政の立ち上げが全くできないということから、被災していない県内外の人たちから、どうぞうちの方へ来て避難生活を送ってください、私どもが支えますということがあったもので、まちの行政の立ち上げが済むまで、そちらにお世話になろうということで行ったわけです。

私たちのまちからは車で約2時間の、鳴子温泉の近くのまちです。そこに避難しまして4カ月ほどいました。

その避難所には、福島以南相馬、それから、双葉町、石巻市、女川町、そういうところから集まって、最大で79名の人たちが来ていました。3月11日に被災して、4月4日のことです。

加美町の役場が全面的に支えてくれまして、健康状態とかさまざまなことが心配だということで、2カ月ぐらいは宿直員を常駐させ、保健師も1カ月は常駐しました。それから、給食の栄養士を張りつけまして、食事づくりそのものを指導するということがされました。

大変よかったと思うのは、避難所が宿泊研修施設だったことです。各部屋ごとの部分と、集団で暮らす部屋とありまして、老人とか子どものいる世帯は個室に入り、大人しかいない世帯は集団で5家族とか6家族が一つの部屋に入りました。そのほかに、食堂は1カ所で、みんな一緒に食事をとります。それから、大きいお風呂があって、男女別で1回に10人以上は入れるお風呂なので、お風呂にも毎日入ることができました。

私たちが津波に遭って避難してから、最初にお風呂に入ったのは十二、三日目です。自衛隊が来て、施設の風呂にお湯を満たしてくれましたが、一番最初は湯船に入るとはだめで、お湯をかぶって石けんで洗い流すと言う感じでした。それだけでもすごくさっぱりして、よかったなという思いをしていましたが、毎日入れるということは天国でした。

そのお風呂場が一緒であったということで、いわゆる裸のつき合いですね。それから、一つの食堂でみんなが集まって食べるということが、集まった七十何人をも一つの家族にしたのです。

赤ちゃんや小さい子どもたちもいて、今の世の中、一人っ子が多いですから、家族以外の人たちとのつき合いがわからないし、子ども同士のつき合いもよくわからない中、最初はけんかをしたりいろいろなことをしたのですが、3カ月を経て、仮設住宅が当たって、そこを出るといえるときには、けんか相手だった子どもが、あいつがいなくなると言って泣きべそをかくという、新しく兄弟ができていたような感じでした。

それから、働ける人は調理人として雇っていただきました。避難した人たちの食事を避難した人たちでつくるという運営の仕方をして、働いた人に給料を差し上げるということです。

それから、ゲートボール場だった場所を掘り起こして畑をつくりました。みんなそこに行ってそれぞれが役割を持てたのです。ほかのところだと、閉じこもって、いろいろな心の病を起こすようなことがあったのですが、私がいた施設では、ほとんどそれがありませんでした。

それから、受け入れてくれたまちは、町民そのものがものすごく温かかったです。健康の関係もあって、朝早く起きてお散歩をするのですが、姿を見つけると、おはようございます、大変でしたねから始まってお話をしたり、帰りに野菜や漬物を持たせてくれたりということで、私は、避難した場所に新しい親戚が20軒も30軒もできたような気分でした。

私たちは津波でみんななくしたとっていたのですが、1週間、10日たったら、携帯も電話も何も使えない中で、情報はどこからか届いていたのですね、親戚、兄弟、友人たちが、荷物を背負って、瓦れきをかき分けて訪ねて来てくれました。それを見たときに、津波は人間関係まで流しはしなかったというふうに思いました。

避難したところでも、全く知らない人たちに歓迎を受けて、友達になってということで、さまざまな人間のえげつなさも知りましたが、それ以上に、人間の温かさとか力強さを見たような、教えていただいたような気がしています。

この場合は、防災をみんなで考えようというところかもしれません。でも、正直に言いますと、自然災害においては、防災という言葉を使ってはいけないのだと私は思っています。あの20メートルを越す津波が来て、自分の家が流される状況を見て、50年前にその津波の高さプラス50センチでつくった防波堤が何の役にも立たなかったのを見たときに、自然に対して、人間が何らかでそういう災害を防ごうということ自体がむだなことだし、もうあきらめた方がいいなという感じがしたのです。

ただ、鴻巣会長からあったように、関連死まで含めると、1,000名の命が南三陸町で亡くなっています。その亡くなった事例を一つ一つ検証していくと、実は、ここ100年、私のところには津波が来ない、だから今回も来ないのだと思って逃げなかった人、それから、何か忘れて戻った人、さまざまなことがあるのですが、結局は、その判断の過ちとか行動の過ち、いわゆる人災の部分が物すごく見えてくるのです。

その人災の部分がなかったら、多分、まだまだ犠牲者は少なかったのだらうと思うのです。そういう過ち、判断ミスをしないことが、防災、減災の根幹にあるのではないかと思います。

三陸地方には、津波てんでんことという言葉があります。てんでんことは、別々に、個々に、それぞれが自分の責任で自分の命を守ることなのです。もちろん、寝たきりの人を放っておいて逃げろという話ではないです。

自力で逃げる能力のある人が、油断して、区長（地区の長）さんが来るまでじっとそこにいたとか、そういうことをできるだけ少なくすればいい。

今回、実際に、仙台湾岸などでは、民生児童委員や区長が、ひとり世帯の老人とか弱い人がいるところを回って歩いて、結局、自分が逃げ遅れて犠牲になっているという事例がものすごくあったのです。それぞれがきちんと対応していれば、そういう犠牲を生まずに済んだのだらうと思います。

皆さんのようなお方です。避難所での組織運営のお話もあるようですが、そういう人がいなくなると、リーダーが不在になって、避難した場所での次の行動がとれなくなるのです。そういう意味もあるので、基本的には自分で逃げるということですね。

今、みんな、公助・共助・自助と言いますが、急な災害の場合は、順番は逆だと思えます。まずは自助です。自分で自分を助けて、次に、集まった人たちがみんなで助け合う、そのうち、行政、組織が何とか立ち上がったときに、一番最後に公助が来る

のだと思います。

今回の災害では役場そのものが流れてないし、役場職員もいないですから、その中で、役場をあてにしたって何の助けも来ません。急な、特に自然災害の場合は、まずは自助、次に共助、最後に公助の順番になるのではないかと考えています。

津波は、養殖しているものも全部持ち去りました。そして、船の9割が流されました。海のそばの人たち、漁民にとっては、海でお金を稼ぐよりほかに何も知らないのです。ですから、8月に、残った船で共同で養殖を始めたのです。そして、この2月から4月にワカメを刈ったら、今までにないものすごくいいワカメがとれました。

また、今までだと2年たたなければ売れるカキに成長しなかったのですが、それが1月にはこのようなカキになっていたのです。写真を見てください、もう3年以上たったのではないかというような、ものすごい成長力です。

ということは、今まで人間が使って老化させていた海だったのが、津波がヘドロも全部持って行って、50年前の海にリフレッシュしたのです。

それから、被災直後に皆さんからいろいろな支援をいただきました。それで、人は一人では生きていけないとか、きずなが大切だとか、さまざまなことが全国で言われるようになりました。今まで、バブルがはじけて、リストラが横行して、個人情報保護法ができた世の中でそういう動きがあるというのは、私は不思議でした。結局、津波が私たちに気づかせてくれたのだなと私は思っています。

それから、エネルギーと私たちの生活の問題です。福島原発事故が起こったせいで、今、私たちはどれほど便利な生活を送っているかということが、クローズアップされました。それで見えてきたのは、もう地球には私たちの生活を支えるだけの力がないということ突きつけられているということです。先進国レベルで地球の環境が支えられる人間の数は、今の地球人口の半分の35億人だそうです。今、既にその倍になっています。そういうときに、原子力発電所をまた動かして、同じようにずっと電気やエネルギーを使って生活してもいいのだという考え方はもうできないはず。どのようにしていけば、私たちの孫たちから生んでくれてありがとうという言葉が聞けるのか、それが、今、私たちに問われているような気がします。

私たちのまち、震災前、人口1万8,000人弱のまちでした。関連死も含めて1,000名の命を失いました。仕事と家をなくして、まちから出た人は2,000名です。仮設住宅に住んでいる残りの人にアンケートをとると、7%の人たちから、このまちに住みたくないという回答が戻ってきています。

1万8,000人から1万3,000人弱へと、急激に、人口減少で、少子高齢化が進もうとしています。被災した土地には、また津波にやられる恐れがあるので、住む家を建ててはだめなのです。標高20メートル以上の被災しないであろう場所に、まちも家も新しく建てるということで、復興と言われているのはそれなのです。

それから、仮設住宅には、抽せんで入れたものですから、今までのコミュニティは全て崩壊し、隣は何する人ぞなのです。その中で、役場に聞きに行っても、個人情報保護法で教えられませんという答えがくるのです。そう言いながら、お前たちは、早く相談して高台移転をどこにするか決めなさいと言ってくる、そういう状況があるのです。

人口減少も、少子高齢化も、私たちの被災地では急激に進もうとしています、皆

さんご存じのように、20年後の日本は1億3,000万人から8,500万人に減ると言われています。これは、この問題だけではなくて、全国の問題なのですね。そういう意味からすると、被災し、急激に人口減少しても、そこで暮らすことがとてもいいことだと言われるようなまちに復興することができたならば、それは、札幌も東京も見習わなければならないまちになるかもしれません。私たちのまちの復興というのは、そういう意味を抱えているのです。

10月に、中越の山古志と川口に行ってきました。その中で、私たちの希望になるともいい言葉を聞いてきています。それは、地震があってどうですかという問いに対して、3年目までは、地震のせいであつたと言われて、5年後から少し変わってきて、今は、地震のおかげであつたとみんな言うようになりました。地震を前向きに、プラスにとらえて、自分たちのまちのよさと自分の力をちゃんと信じられる生き方ができるようになってきている。ああ、おれたちが目指すのはここだなと思いつつながら帰ってきたのですが、そういう経験がございました。

高橋所長

後藤さん、ありがとうございました。

それでは、皆様方にも、災害発生時の避難場所に関してお教えいただきたい、ご意見を伺ってみたいということがございましたら、お話し願いたいと思います。

会員

私は保護司ということで、犯罪の関係にどうしても結びつくのですけれども、やはり、生活が長期的になってくると、それぞれの生活環境や食事の問題がどこまで支援されて持続されるか、それから、それぞれお持ちになっている蓄えの問題ですね。入ってくるものではなくて、支出がかさんでくるのです。それで、最終的には事件絡みとか、人間関係のきずなが崩れるということが出てきがちです。それから、現に、今、機能していないのは、更正保護ですね。被災地では、役場の関係も機能していないし、保護司の関係も機能していません。実際に、更正保護の関係のボランティアの方も亡くなっていたりもします。

後藤講師

実は、田舎のまちで、個人情報オープンになればなるほど人は暮らしやすいことがわかっています。保護しよう、ガードを固めようということは、孤立することなのです。その矛盾がものすごくあります。困ったときほど、お互いに結びつきが強くなります。

それが、いろいろな支援があつて豊富になってくると、最初は何でもありがたくいただいていたものが、これは旨くないから要らないとか、これは古い下着だから着ないとか、そういうふうになっていき



ます。豊かになってくると、人間の嫌らしさが出てくる感じがありますね。小さい集団、集落だと、保護とか保護観察とか、そういうものは全員で見ている感じなので、別に保護司さんがいなくとも機能する状況になります。

保護司が専門に見る形になると、あいつは特別な悪いことした人間ということで、仲間外れにされる状況があるのです。ですから、法で守るのか、虐待するのか、ものすごく難しい問題が見えてきます。

今、私が入っている仮設住宅は、今日、一緒に来ている三浦さんがその自治会長ですが、私有地につくっていただいた仮設住宅なので、ちょっと小さいですね。18戸ですが、全部同じ集落の人でみんな旧知です。そうすると、みんな見えているのですよ。あそこは食いが不足しているなという、だれかが持っていき、あそこはあさんがいないから食事に困るだろうなという、老人たちが交代で持っていき、そういうことが物すごく出てきて、食料では、ほとんど問題ないです。

結局、高いところに土地を求めて、宅地をつくって、そこに家を建てなければならない。でも、歳をとると、金融機関はお金を貸してくれないでしょう。流された家のローンがまだ終わっていない人もいる中で、先の見えなさに対しての不安はどうしてもあります。そういう人たちも一緒に、集落を再生するための相談をできるようにしようというお話を、今はしているのです。

町では、自分で家を建てることができなかつた人を、町の3カ所程に3、4階のアパートを建てて、そこに押し込むという計画ですが、私たちは、札幌のような都会ではないので、みんなだだっ広い平屋みたいなところに住んでいたものですから、音を立てると隣に聞こえるというようなことが、とても嫌な人たちばかりなのです。

だから、そういう生活にはなじめないで、私が避難したところのように、個々を守る部屋は別々にあって、食堂やふる場などの公共スペースがある、いわゆるグループホームみたいな公営の住宅を建ててもらって、そこに住む方法を提案しようなんて話もしています。

会員

先ほどから言う、基本になる生活維持ということになると、個々の蓄えと収入源、それから、義援金がどういう格好で皆さんに配分されるのか、そういった関係はどういうふうになっているのですか。

後藤講師

当初は、1人世帯で75万円、2人世帯以上で100万円、それが仮設に入居するときに口座に振り込まれるのです。それから、冷蔵庫、クーラーなどの6点セットが日本赤十字から支給されていて、今日から2年、家賃はただですから、自分で生活しなさいと言われたのです。

ところが、去年の8月、南三陸町の仮設住宅で、水道は出ます、電気は来ましたが、でも、水道をひねると半月ぐらいいはしょっぱかったです。それから、例えば100万円もらって、買い物をどこでしようかというときに、店が一つもないのです。早くできたコンビニがあるくらいです。ですから、1時間かけて買い物に行かなければならないのだけれども、交通手段も、バスはない、タクシーも走っていない、ガソリンは

高くなってという状況だったのです。

インフラの整っていないところに、家を建てたから、家賃はただにするから、あとは一人で生きていけと放っぼり出されたようなものです。また、診療所、クリニックはありますが、いまだに病院と名のつくものはないのです。入院の必要な病気の人は、仙台とか石巻に行かないとだめなのです。そういう部分は公助に属する部分なのですが、そういうものがなかなか整わないのです。

会員

今後の課題がどういう格好で進展していくかというか、目安というのはどういうふうに見ているのですか。例えば、高台の住宅も、お金もないとか、資金的な問題もあるし、まちづくりのことも当然出てくるでしょう。

後藤講師

私は、ある程度のめどが立つのに5年はかかるだろうと思っています。それで、それから各々が生活を立て直していくには温度差もありますから、10年ぐらい見ないとだめかなと思います。

ただ、75歳、80歳を超した老人にとっては、できれば、自分の家から葬式を出してもらいたいということがあって、ものすごく焦っているのです。実は、焦ると、先が見えなくなるのです。自分のところの狭い範囲しか見えないのです。だから、隣の人とどのようにかわり合いながら、共助をつくりながら移転するとか、そういうものが見えなくなってくるのです。

今の政府の悪口を言いたくはないのですが、当初は仮設住宅の入居期限は2年だったのです。それが、1年たって、また1年延ばされたのです。それと同時に、最初の2年の間に自分の家を建てた人には200万円援助すると言われました。それが、1年延びたので3年のうちになったのです。それは、一見、自活を促している政策に見えるのですが、200万円というエンジンをぶら下げて、ムチを入れられているような感じです。そういう政策のもとでは、何も先が見えてこないのです。希望が見えなかったら、生きる力にならないのです。

それを、5年が10年になろうとも、おまえたちを支えてやる、しっかり必要なものを言ってよこせ、600年に一度、あるいは1,000年に一度の震災なのだから、法律もないし、前例もない、おれたちはそれに即応した形の対策をしていくという国からの発信があれば、安心して、希望を持てるのです。そうすると、みんなで話し合いながら前に進むことができると思います。

会員

人口減は何とか食い止められそうなのですか。

後藤講師

まだ無理ですよ。実は、雇用がないのです。

会員

雇用がないから、結果的には収入にならないですものね。

後藤講師

生活費が稼げないところではどうしようもないので、特に、若い人ほど、皆働き口のある方へ出て行きます。

会員

極端に言うと、5年先、10年先、どこまで辛抱できる人が残れるかという問題しなくなってしまうですね。

後藤講師

私たちを支える基本的な力というのは、私は、自然の生産力だと思っているのです。その自然の生産力が基礎になって、それに、交流人口であったり、大きな会社があるからという形で増えていくのだらうと思うのです。特に、私たちのように浜辺の1次産業を主にするところでは、やはり自然の生産力ですね。ですから、ある程度減少して、自然の生産に間に合った人数になるのは、しょうがないことかもしれません。

そういう中で、今、被災地ツアーに多くの方に来ていただいておりますが、それを、単なる被災地目当てのものではなくて、それこそ去年の言葉のきずなと結びついて、それが生産と商品の関係で結びつく形でやっていけば、将来的には、まちの6次産業化とかさまざまなものにつながっていくと思います。

そういう政策をとっていけば、「いんどり事業」で上勝町がわき上がったように、被災地でも可能になるだらうと思います。今、全部を引きとめて残すよりも、ここで生きていられない人は、出て行ってもらっていいと思います。その後に、人数が少なくても、いいまちをきちんとつくっていくことが一番大切です。

会員

ちょっと戻って質問したいのですが、当初は、学校で避難生活をされましたね。その中で、こういうことが一番必要であるというのはどんなことですか。

後藤講師

やはり、まとめ上げていくリーダーの存在ですね。そのリーダーは、公平な人です。無私な人でなければみんながついてきません。そういうリーダーの育成ということがすごく大切だと思います。備蓄とかさまざまな問題もあります。私の母校の中学校は、20メートル以上高いところにありますが、そこまで津波が来て、その集落で備蓄していたものがみんな流されるという状況が起きていますし、防災グッズを買って持っていたても、それを持って逃げた人は一人もいません。急場にはだめですね。とにかく、いかに逃げおおせるか、自分の命が助かるか、それですね。

会員

今までは地震災害が中心ですけれども、話を聞いてきますと、生活上一番困るのは、

食は当然必要だと思いますけれども、食べますと、出るものが出ますね。その処理が困ると思うのです。

後藤講師

それは、間違いなく都市では困るでしょう。コンクリートを掘り返して便所をつくるわけにはいきませんからね。私たちのところも水洗便所がありました。役に立ちませんでした。それで、グラウンドを掘って、コンパネで囲って仮のトイレをつくりました。それがいっぱいになると、次のところを掘って行ってやりました。また、近くに小川があったものですから、それをきちんと清掃して、洗い場とかさまざま使えるようにしました。

そういうことで、一番役立つのはローテクです。ストーブでも、しんがあって、しんを上げてマッチでつけるストーブは使えるけれども、温風ヒーターは全く使い物になりません。ですから、最終的には、昭和30年代の生活、ローテクが一番基本になりますので、アウトドア派の養成も必要かもしれません。

宿泊研修施設なので、飯ごうなどもあったのですが、高校生にご飯を炊かせたら、毎回、黒くなったご飯が来るのですよ。それで、おまえたちは飯ごう炊飯をしたことがないのかと言ったら、ありませんと言うのですね。おまえ、水がなくなるまでずっと火にかけていただろう、そうではなく、水が吹きこぼれなくなったら火から外して、逆さにして置いておくんだ、そして蒸らすんだと言うと、その次の日から立派なご飯が炊けるようになりました。そういう基本的なことが大切ですね。

それから、食えるものと食えないものを見分けをする人がいたり、森の生活みたいなものをきちんと熟知した人がいると、すごく助かります。それから、道具は、エンジンのあるものはだめで、なたとか、のことか、原始的な道具ですね。あれは備蓄としてぜひお薦めします。それがあれば、多少の物はつくれます。

会員

今のお話を聞いて初めてわかったのですが、基本的に、津波の来たところにはもう家は建てることのできないのですね。

単に新しいまちをつくるとなると、仕事がない、それでは企業誘致するとか、そういうことにも力を入れているのですか。

後藤講師

浸水した企業やお店は、かさ上げをして建てていいことになっています。ただ、夜、寝る場所はそこではだめだということになります。私たちのような小さいまちの商店というのは、1階が店で2階に暮らしているところがあるのですが、それがだめなのです。店は浸水した場所、寝るところは高台という生活でなければ許可が出ないのです。しかし、そうすると、二重の経費がかかるのですね。資金的な問題も出てきているので、いろいろな意味で、そういう点は復興庁とかにかけ合う必要があると思っております。

札幌のような都会だと、ここは震災しか考えられないでしょうから、丈夫なビルをそのようにしておく方法もあると思います。また、札幌がそういうことになったとき

に、最初から田舎に受け入れてくれるところをつくっておくということですね。北区とどこが援助協定を結ぶという形でやっていて、最初から少し広めの集会所なり公民館なりをつくってもらって、そこに収容していただくということですね。水など生きていくために必要なものを確保できる場所に、お互い協定を結んでおくこと大切かと思います。

会員

水の問題は大きいですね。

後藤講師

今、東京などでも必死に考えているのですが、難しいですね。

会員

先ほどの話で、蛇口をひねったら、しょっぱい水が出たという話がありましたけれども、それは改善されたのですか。

後藤講師

改善されました。ただ、南三陸町の水源池のところまで津波が来たのです。新しい水源池を探すのはなかなかできないものだから、とりあえず、そこからくみ上げて、余りしょっぱくない水になるまで時間をかけたのだけれども、お盆のころで、仮設が出来上がってみんな入居したのですが、それができ上がったころにインフラの整備が間に合わなかったのです。

会員

今、1万3,000人くらいの方が仮設住宅に全部入っているのですか。

後藤講師

いえ、7,000名くらいです。山間あるいは高台で家が残っている人もいますが、約半分が仮設住宅です。リアス式海岸で、余り平地がなくて、山からすぐに海につながる場所なので、今、隣の登米市に一番大きな仮設が建っています。そこで便利な生活をしている人は、今さら南三陸に帰らなくてもいいよなんて気持ちになってきているかもしれません。

会員

仮設住宅の期間は、2年くらいでしたか。

後藤講師

今は3年になりました。ただ、来てみればわかりますが、最低でも5年いないとだめだろうと思います。私どもが政府に言っているのは、最初から5年にしてくださいということです。自分でここから出られる人はいいけれども、そうでない人にとっては、最初から5年は認めると言われた方が安心するのです。それを1年ごとに言われ

ると、いつも不安なのです。

会員

三陸町の瓦れきは処理されたのですか。

後藤講師

三陸町の場合は、実は、三陸町に焼却処分場をつくって、3年で処理する予定です。去年の夏、海から上げたものとか冷凍庫から散乱したものを集めたものですから、腐敗して臭いはすごいしハエが発生してと、ものすごくひどかったのです。ですから、瓦れきを何とかしろという話が出ました。でも、1年たつと、腐敗するものは全部腐敗してしまって、今残っているものは腐敗とは余り関係のないものですから、そう急ぐ必要はないのです。

石巻の瓦れきは、何%かを北九州に持って行って、今、焼却が始まりました。その経費だけで1,700万円です。輸送賃だけでそのお金がかかるのです。そして放射能を心配する人もいて、そんなのはだめだと反対する人もいる中で、持って行っているのです。そんなお金があるのだったら、地元でやって、そのお金で人を雇って雇用を生み出した方がずっといいです。今残っているのは、木材であったり、資源だと思っています。原発が停止して電力不足になる中で、そういうものを資源エネルギーとして考えていくのも一つの手だろうと思います。ですから、何も3年でやらなければならない、全国で処理しなければならないという問題ではないと思っております。むしろ、南三陸だったら3年ではなく、5年か10年にして、その10年間は、この一家は収入が保証される、だからローンも借りられるよということにした方がずっと私たちのためになるのです。

会員

そこに焼却炉をつくるということを政府でやってくれば、仕事になりますものね。

後藤講師

今、350億円をかけて焼却炉をつくっているのです。計画では、それだけかけてつくったものを、3年たって処理が終わったら壊して、また持っていくようです。

私たちのまちには、ダイオキシン問題があってから、燃えるごみの焼却炉がないのです。それで、別のところに委託してやっている状況ですから、ものすごく矛盾が見えてきているのです。

会員

長期的なローンを組んでいる方の返済などは、どのような扱いになっているのですか。

後藤講師

今のところは、金融機関との話し合いですね。それで返済を猶予してもらおうとか、少しずつやってもらおうとかでしょうか。

私は、東北放送という放送局のインタビューで、平成の徳政令でゼロにしろと言いました。よくゼロからのスタートと言うけれども、今、私たちはゼロのスタートではなくマイナスのスタートなのだから、ゼロにしてもらえれば一番助かるのだという話をしました。ただ、なかなか難しいようです。結局、日本の経済の政策が、私有財産制を基礎にしているというところで、さまざまな政府の援助の限界があって難しいということですね。

会員

行政的な役場の復興というのはどの辺まで進んだのですか。

後藤講師

かなり進みました。ただ、200人足らずの人数のうちの四十数名が犠牲になったので、札幌から来ていただいているかどうかはわかりませんが、他の市や町から応援を受けています。ただ、応援に来ていただいている人は、当然ですが町民の顔を見てもわからないのです。それから、どこどこという地名を言っても、どこなのかわからない方なのです。だから、なかなかフルに活動できないという面があります。

会員

それはあり得ますね。だから、さっき言われたように、やはり、サブの方にそういう人がいないと、なかなかうまく援助できないのでしょうかね。

後藤講師

そうなのです。やはり、避難所の運営も、避難も、さまざまなことも、最終的には人ですね。今回、人が大事だなというふうに私は思いました。

会員

関東の震災や戦後の復興などを見ていると、やはり復興ということになったときは、長期的な展望で、相当辛抱強く取り組まなければいけないですね。

後藤講師

長期の展望を持ちながら、今、何をしなければならぬか、できるかということをやっていないと、目先だけやっていくと、こっちに行くのかあっちに行くのか、全然わかりません。

だから、今、急げ急げと言う人に私は言っているのです。奥尻町は、町長が優秀で3年で復興した。ただ、復興の間、工事請負者がいっぱい来ていたときは、復興する意味がある商店街だったけれども、その人たちが、工事が終わっていなくなって、物を買う人がいない、若い人たちがまちから出て行く復興になってしまった。そういう、かつての失敗を見習ってはだめだ。急がずに、じっくり、一歩ずつでいいから、きちんとした復興の形をとらなければいけないと私は言っているのです。

会員

南三陸町は、どちらかという、産業は海産物が主なのですか。

後藤講師

そうです。内陸部では、仙台牛の肉牛の産地になっていたり、農業では、菊づくりですね。黄金郷という言い方をしていますけれども、どちらかという、仏様用の菊づくりがかなり盛んです。

多分、今後は、ある程度、観光で交流人口をふやす中で、6次産業化の中で、少ない生産でもきちんと収入を得られる形をどうつくっていくかということが大切だろうと思っています。

会員

地震が起きてから津波が押し寄せるまで、三陸町ではどのくらいかかったのですか。

後藤講師

場所によって違います。早いところは30分、遅いところは50分ぐらいです。

会員

例えば、この札幌市の北区は、せいぜい海拔でいうと五、六メートルなのですね。5メートルまでないと思いますけれども、30分だったら、逃げる場所が全然ないですよ。

後藤講師

南三陸町は、鴻巣さんが話されましたけれども、平均の波の高さは16メートル50です。遡上波高、いわゆるこういうところを反動でかけ上がるのですが、これの最高到達点が33メートルです。

会員

最高で海岸から何メートルぐらいまで行ったのですか。

後藤講師

3.5キロメートルです。これが南三陸の被災地図です。このピンク色の部分が、津波が到達した場所になっています。赤い点がついたところに、その到達の高さが記されています。

皆さんに配られたとおり、このようなまちだったのです。だから、地元の人でも、あれ、ここはどこだったかと、わからなくなるのです。

会員

家が一軒壊れただけでも、あれ、ここ何建っていたかなというぐらいですが、全部なくなってしまっていますからね。

後藤講師

空襲にでも遭った後の写真みたいでしょう。

会員

被災した土地は、国が買い取るのですか。

後藤講師

買い取りしてくれというところは買い取ります。ただ、今、問題になっているのは、借地に家を建てていたところは、地主には金が払われますが、借りていた人にはいきません。もう一つは、遺産相続を二、三代やらないできたところは、それが終わるまで何ともできないという問題があるのです。

会員

いわゆる凍結ですか。

後藤講師

はい。それで、実はうちの方に、その入会権の山があって、そこが高台移転にいいのではないかとということで候補になったことがあるのですが、その全部の所帯が共同権の遺産相続をしていないと、3代ぐらいしていないという家が一軒でもあるとだめなのですよ。

会員

入会権のところでも、国営地もあるのではないですか。そういうところもやっぱりだめなのですか。権利があるということですか。

後藤講師

はい。例えば、契約講(主に東北地方にある村落の集団)という組織ですけれども、20軒ある中で、一軒でもそういう家があると、その家の手続きが済まないといけないということがあるので、超法規的な措置をしていただかないと難しいと思います。

会員

そうですね。それは前に進まないですね。

会員

嫌なことを思い出させるかもしれないですけれども、発生してすぐに家族3人逃げられたというのですが、そのときは、もうすぐに逃げようと思ったのですか。

後藤講師

いえ、私は、実は、次の日が自分の母校の卒業式で、その前の日に同窓会の入会式をやっていたまして、それが終わって、学校で靴を履いているときに地震が起きて、その地震で、これは宮城県沖だ、すぐに津波が来ると思ったのです。

学校は20メートルの高さだったので、学校に来るなどということは考えなかったのですが、家は高さが3メートルくらいで、海から150メートルくらい離れたところなのです。そして、女房も息子も津波を知らないの、あいつらはやられてしまうと、生徒を頼むと先生に言って、そこからすぐに戻ったのです。

その学校には、22メートルまで上がったようです。とにかく、せかして逃げまして、高台から海を見たら、海に水がないのです。

実は、チリ地震津波のときに、私はそれを見ているのです。ああ、また海の底が見えたと思いました。これはいくら津波が来るかわからないと思いました。

今の家は、明治29年の津波のときに被災して、そこに建て直したかやぶき屋根の大きい家で、いろりを囲んでみんなで遊んでいる家だったので、それが流されていくのを見たときは、やはり悲しかったですね。

会員

やはり、過去の経験というか、すぐ逃げなければという気持ちになったのですね。

後藤講師

そうですね。私は、奥尻で15分で来たということが頭に入っていましたので、とにかく、すぐ近くで起きた地震だから、猶予はないということで家に戻ったのです。結果的には、もう少し余裕があって、家の方に来たのは40分後でしたね。

でも、やはり、女房はパニックになって、何を持って逃げるか全然見当がつかなくて、防災グッズも持たなかったし、大事な財布も持たない、それで、仏壇に行って位牌を抱えたのですよ。「位牌なんかどうでもいいから、とにかく逃げろ。」と言ったら、腹を立てたのか、上にあった親父の写真をぼんと乗っけて、それだけが今は残っています。そんなものです。慌てているので、冷静な判断なんかできる人はほとんどいないです。

会員

大事なことは、そういう教訓がきちっと浸透するということですね。

後藤講師

それと、昭和35年から、5月24日が被災した日なのですが、毎年、津波避難訓練をやっていたのです。それをやっていたのですが、やはり、訓練のための訓練は役に立ちませんでしたね。というのは、私たちも、参加しないと、あそこは逃げないと言われるから、人目を気にしながら避難するのですよ。ところが、練習だと思っから、大事な防災グッズも何も持たないで、手ぶらで行くわけですね。ですから、いざ起きてしまうと、その延長線上で、何も持たずに行ってしまうのですよ。

今回の3月11日というのは、ものすごく寒い日だったのです。夕方から雪が降って、山の上で火をたいて一夜を過ごしたのですけれども、食料を持った人、防寒着を持った人もいないのです。着のみ着のままなのです。みんな、寒くて震えながら、肩を寄せ合って、火に手をかざしていましたね。

もし、訓練をやるのだったら、本番さながらの実践訓練をずっと続けていないと身

につきません。それは、痛いほど感じましたね。どうせ、また戻れるのだということで、私も、大きい津波でも2階までは上がらないだろう、1階ぐらいで済んでくれるだろうなと思っていたのです。実際は、家がなくなりましたからね。また戻れるという感覚はみんな持っていたようです。それで、逃げてから、へそくりを忘れたということで戻って犠牲になった人とか、血圧の薬、常備薬を忘れたとって戻った人とかもいましたね。

会員

火災においてもそうですね。大事なものがあるからと戻り、命を落とすこともありますから、やはり、まず、自分の身の確保ですね。

後藤講師

命があれば、あとは何とかなるものだというふうに関き直らないとだめですよ。

高橋所長

それでは、まだまだお話ししたいところですけども、時間が参りました。本日の座談はこれで終了させていただきます。

いま一度、後藤さんにお礼を申し上げたいと思います。

後藤さん、どうもありがとうございました。